

「また訪れたい」と
思ってもらえる
まちづくりを

島津家第33代、島津忠裕さん。(株)島津興業の副社長のほか、照国神社や鶴嶺^{つるがね}神社の神職にも就かれ、多忙な毎日を過ごしている。第28代当主の斉彬が築いた集成館をはじめとする、鹿児島島の3つの構成資産を含む「明治日本の産業革命遺産九州・山口と関連地域」が2015年の世界遺産登録を目指している現在、世界文化遺産を持つ意味やこれからの展望について話を伺った。

島津家第33代

しまづ ただひろ
島津 忠裕さん

Tadahiro Shimadzu

島津家は何を目指して 集成館事業に取り組んだ と考えますか？

ひと言で言うと、強い日本をつくるため。薩摩藩は大陸に近い地の利を生かして積極的に海外交易を行っていたため、海外からの産物・情報・技術を受け取ることができた先進地でした。同時に、隣接する琉球王国を通じて、世界情勢の影響をいち早く受けて変革に直面するポジションでもありました。

江戸時代後期、琉球王国に対して欧米諸国が「黒船外交」を仕掛けてくると、薩摩藩はそれらの対応に追われるようになります。このような外交経験を積み重ねたことで、当時の



日本の置かれた情勢や実力差を現実的に見ることでできました。島津斉彬は、攘夷は「無謀の大和魂」と強く戒めましたが、このような実力差を一刻も早く埋めて、日本を欧米諸国と対等な国にするため、集成館事業に着手し、近代化を進めたのです。

経営学の言葉に「辺境の革新性」という言葉があります。革新は中央・中枢ではなく、辺境・外縁で起きるという考え方です。外界・外国と接しているからこそ、海外情勢に敏感になり、変革に対する心理的エネルギーや危機意識も大きい。この文脈で考えると、薩摩藩が日本の近代化や明治維新の中心的役割を果たしたのは、必然だったのだと思います。

世界文化遺産登録 された際の課題は 何でしょうか？

旧集成館が世界遺産に登録されたときに備えて、10年前から国内外の世界遺産登録地を回ってきましたが、世界遺産地区だけでなく、その周りのまちづくりも含めてしっかりと考えないといけないと強く感じました。課題としては大きく2点挙げられると思っています。

1 点目は世界遺産地区への来訪者

のアクセスをいかにして上手く確保するか。磯地区は鹿児島市内でも有数の交通渋滞地点ですが、世界遺産に登録されても道路混雑をこれ以上悪化させない方法を考えなくてはなりません。また、地形的な制約から、駐車場の拡張余地も多くは望めません。そこで現在、JRの新駅設置を目指して活動中です。磯地区は私が生まれ育った場所でもありますので、ぜひとも実現させたいですね。

2 点目は世界遺産効果をいかに持続させ、県内全域に広げられるか。これには県外から訪れる観光客が県内を移動するための2次交通を便利に利用できる仕組みが必要です。2次交通の結節点であり、鹿児島島のまちの発展の原点で、近隣に多くの歴史的・文化的な地域資源を抱える鹿児島駅周辺地区のポテンシャルに注目しています。遺産登録の大きな目的は遺産の保護ですが、ひいてはそれがまちを元気にすることにもつながると思っています。世界遺産登録をきっかけに、観光者目線のまちづくりを、さらに進めていかななくてはならないと感じています。

影響を受けた歴代当主は いらっしやいますか？

影響を受けたというよりは、大き

な存在だな、と感じている当主はいます。第25代当主の島津重豪です。11代将軍家斉の舅(娘茂姫が御台所)として、将軍家と島津家の友好関係を向上させ、造士館や明時館(天文館)などの学術機関を設立して薩摩藩の文化水準を引き上げ、蘭学や博物学に強い関心を示しました。浪費家とか蘭癖大名と揶揄されがちですが、幼い頃の斉彬は曾祖父・重豪の薫陶を受けて育ちました。重豪の業績は、斉彬の集成館事業に大きな影響を及ぼしたと思います。

鹿児島島の歴史の重みで生きている立場としては、世界遺産登録が鹿児島の方々の誇りや自信になるよう、鹿児島島の歴史的な文脈を読み解いて「鹿児島には誇るべきものがある」という主張にこだわっていきたくと思っています。「鹿児島なくして島津なし」ですから、私自身も鹿児島のために行えることを、信念を持ってやり続けていきたいです。



「かごしま観光まちづくり研究会」のフォーラムにて講演する島津さん。